

文部科学省特別補助「オープン・リサーチ・センター整備事業」
海外主要オペラ劇場の現状調査、分析比較に基づく、わが国のオペラを
主とした劇場・団体の運営と文化・芸術振興施策のあり方の調査研究

公開講座

＝ オペラ劇場運営の現在・イギリスⅡ ＝
オペラをめぐる祝祭、その今日的あり方Ⅱ
～グラインドボーン音楽祭に学ぶ

2007年1月28日（日）13：30～16：30
昭和音楽大学 テアトロ ジーリオ ショウワ

講義録

《オープン・リサーチ・センター整備事業について》

昭和音楽大学オペラ研究所では、平成13～17年度の5カ年にわたり、文部科学省「オープン・リサーチ・センター整備事業」特別補助を受け、世界の主要オペラ劇場の現状を調査分析し、わが国のオペラ制作と文化・芸術振興策について研究を行いました。また世界の60のオペラ劇場と連携をはかり、オペラ劇場運営に関する最新データの収集と公開に努めています。その一環として開催してきた公開講座では、これまでの16回で、37名にのぼる国内外のオペラ制作をリードするオペラ劇場関係者を招聘し、世界でも類のない試みとして、各界より高い評価を受けています。平成18年4月から、2年間にわたり研究プロジェクトを継続し、日本におけるオペラに関する情報収集・発信拠点として、オペラ研究所のさらなる機能整備と強化を目指し、調査研究を行っています。

《今回の公開講座について》

ドイツのバイロイト、オーストリアのザルツブルクと並ぶ世界3大音楽祭の1つ、グラインドボーン音楽祭。70年の歴史を誇る優雅な田園地帯でくりひろげられる音楽祭は、名門クリスティ家の経営によって、毎年数々の名演を生み出しています。会場では観客がフォーマルな服装に身を包み、ガーデン・ピクニックとオペラを一緒に楽しむ特別な雰囲気知られ、若手歌手登竜門としてのイメージ作りなど、さまざまな運営の工夫によって、イギリスを代表する音楽祭となりました。政府からの補助金を受けず、財政的独立を信条とする音楽祭はいかにして可能になるのか。今回はクリスティ家の跡取りとして、若くして音楽祭理事長を務めるガス・クリスティ氏と、運営事務局を総括するデイヴィッド・ピッカード氏をお招きし、歴史あるオペラ・フェスティバル運営と芸術上のアイデンティティの確立、これからの展望を語っていただきました。

● プロジェクト研究者(50音順) ●

- 五十嵐 喜芳 (昭和音楽大学学長・昭和音楽大学オペラ研究所所長)
- 石田 麻子 (昭和音楽大学専任講師)
- 上原 恵美 (滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール館長)
- 大賀 寛 (日本オペラ協会総監督)
- 黒田 恭一 (音楽評論家)
- 関根 礼子 (音楽評論家)
- 武瀧 京子 (昭和音楽大学助教授)
- 寺倉 正太郎 (音楽評論家)
- 永竹 由幸 (元昭和音楽大学教授)
- 中山 欽吾 (財団法人東京二期会常務理事)
- 野村 三郎 (音楽評論家)
- 広渡 勲 (昭和音楽大学教授)
- 古橋 祐 (昭和音楽大学助教授)
- 堀内 修 (音楽評論家)
- 美山 良夫 (慶應義塾大学教授)
- 山崎 裕視 (昭和音楽大学講師)
- 渡辺 裕 (東京大学大学院教授)
- 渡辺 通弘 (昭和音楽大学名誉教授)

公開講座

＝オペラ劇場運営の現在・イギリスⅡ＝

オペラをめぐる祝祭、その今日的あり方Ⅱ

～グラインドボーン音楽祭に学ぶ

講師

ガス・クリスティ(グラインドボーン音楽祭理事長)

Gus Christie / Glyndebourne Festival, Executive Chairman

デイヴィッド・ピッカード(グラインドボーン音楽祭総監督)

David Pickard / Glyndebourne Festival, General Director

第Ⅰ部 基調講演

第Ⅱ部 パネル・ディスカッション

冒頭挨拶 広渡 勲 (昭和音楽大学教授)

パネリスト 長谷川芳弘 (NHK音楽・伝統芸能番組部部長)

モデレーター 黒田 恭一 (音楽評論家)
石田 麻子 (昭和音楽大学専任講師)

通訳 中嶋 寛

総合司会 武濤 京子 (昭和音楽大学助教授)

後援：ブリティッシュ・カウンシル、川崎市教育委員会
川崎市麻生区役所、「音楽のまち・かわさき」推進協議会

目次

講義録編

第Ⅰ部 基調講演	5
----------	---

第Ⅱ部 パネル・ディスカッション	31
------------------	----

資料編

講演概要	44
------	----

NHKが放送したグラインドボーン音楽祭オペラ公演	45
--------------------------	----

グラインドボーン音楽祭について	46
-----------------	----

グラインドボーン音楽祭2007年シーズン・プログラム	50
----------------------------	----

グラインドボーン音楽祭2006年シーズン・プログラム	51
----------------------------	----

出演者プロフィール	55
-----------	----

第 I 部

基調講演

【司会】 こんにちは。昭和音楽大学の新校舎によるこそお運びくださいました。

きょうは、この新校舎の落成記念特別企画として、公開講座、そして、劇場体験会を皆様とともに進めていきたいと思いをします。

第Ⅰ部の基調講演の間に、ご質問等がございましたら、この資料の中の質問記入用紙にお書きとめいただき、休憩時間の中に、ロビーで担当の者にお渡しください。第Ⅱ部のパネル・ディスカッションでは、いただいたご質問等もあわせて進めてまいります。そしてPARTⅠの公開講座の後、PARTⅡとして、新劇場の体験会を行っていききたいと思いをします。

さて、この特別企画は、文部科学省の特別補助「オープン・リサーチ・センター整備事業」の研究プロジェクトの一環として、昭和音楽大学オペラ研究所が主催しております。まず最初に、この研究プロジェクトの総括責任者である、昭和音楽大学教授の広渡勲より、ごあいさつさせていただきます。

【広渡】 昭和音楽大学の広渡でございます。本日はこんなに大勢のお客様にお越しいただきまして、大変ありがとうございます。

この公開講座は今回で16回目でございます。ことしのテーマの1つとして、世界のオペラ・フェスティバルというものを取り上げようと考えました。今回は皆さんよくご存じのバイロイト、ザルツブルクと並ぶ世界3大フェスティバルの1つと言われる、英国グラインドボーン音楽祭を取り上げることにいたしました。

皆様のお手元に、グラインドボーン音楽祭についての資料があると思います。1934年、ジョン・クリスティ^{*1}氏とその奥様のソプラノ歌手、オードリー・ミルドメイ^{*2}さんが創設されたと書いてございます。この音楽祭では、75分の休憩を挟んで、フォーマルな服装に身を包んだお客様が、美しい庭園でピクニックや食事をしながらオペラを楽しむという独特の雰囲気をつくっています。よく調べましたら、同じ年、日本では藤原歌劇団^{*3}が創立されたそうです。

私はロイヤル・オペラ・ハウスとの仕事などを通して、何度もロンドンに行っていたのですが、グラインドボーンにはチャンスがなく、去年の夏、初めて伺うことになりました。ロンドンのビクトリア・ステーションから汽車に乗って約1時間、夏の暑いのにタキシードを着て、汽車に乗り込んだら、あっちにもこっちにも黒服やフォーマルなドレスを着た方がいらっしやって、「ああ、この方はお仲間なんだ」という感じでした。ブライトンの駅からタクシーに乗ってグラインドボーンに行ったのですが、劇場に入った瞬間に、

このテアトロジオーのホールとサイズが似ているなと思いました。聞きましたら、ここテアトロジオーが1,265席（編注：オーケストラ・ピット使用時）ありますが、グラインドボーンは1,250席。劇場のサイズがほぼ同じというのも、これも何か不思議なご縁だなと思いながら、きょう、ご紹介する総監督のデイヴィッド・ピッカードさんにお目にかかりました。彼と会ったとたん、どこかで見た顔だなと思いました。なんと20年前、第2回のロイヤル・オペラ日本公演で来日されていたそうです。「もし可能なら公開講座に出ていただけないでしょうか」という話がそこで出ました。帰国したらすぐご返事をいただきました。「来年の1月ごろだったら行けます」ということで、きょうの運びになった次第です。本校と新講堂は4月開校ですけれども、グラインドボーンの劇場とこのホールが、類似点や、いろいろとご縁があることを考え、この劇場のオープンを少し前倒しして、グラインドボーン音楽祭についての公開講座を開催させていただくことにしました。そうしたいろいろな偶然が重なり、本日、この会が持てたわけです。

私の個人的な夢ですが、グラインドボーンはロンドンから汽車に乗って行きます。同様に、大勢のお客様が新宿駅からタキシードを着て小田急線に乗って、ここ新百合ヶ丘に来て、オペラを楽しむ。ここテアトロジオーでグラインドボーン音楽祭の来日公演がいつの日かできるといいなと思っております。（拍手）

ありがとうございます。それではご紹介させていただきます。グラインドボーン音楽祭はクリスティ家の個人経営でございます。そのクリスティ家の3代目当主、ガス・クリスティGus Christieさん、43歳です。そして、総監督デイヴィッド・ピッカードDavid Pickardさん、46歳。この若い2人が、世界的な音楽祭を運営されております。イギリス映画のジェームス・ボンドを彷彿とさせるイケメンの2人です。

それではご紹介いたします。ガスさん、デイヴィッドさん、どうぞ。（拍手）

【クリスティ】 広渡先生、それから昭和音楽大学の皆様からお招きをいただきまして、大変光栄に存じます。そして、この落成記念のときにお話しできること、この美しい劇場にお招きいただきましたことを大変喜んでおります。

この劇場は、私のよく知っているもう1つの劇場を思い起こさせます。そのグラインドボーン・フェスティバル・オペラは、サセックスの田園地帯に1934年に創設されました。始めたのは私の祖父、ジョン・クリスティと祖母のオードリー・ミルドメイであります。祖父がこの敷地と屋敷を相続したのは1920年です。と同時に、地元の建設会社などを買収して、まずは建物のビクトリア風の特徴を取り除くところから始めました。



劇場併設以前のグラインドボーンのクリスティ家屋敷



グラインドボーン音楽祭創設者
ジョン・クリスティ

改築の一番大きな部分は、音楽室を加えたことです。そこに大聖堂で使うような大きなオルガンを入れようということでした。そして、この部屋が1920年代のグラインドボーンにおける音楽の中心になっていったわけです。



改築時に設置されたオルガン・ルーム

祖父は既に音楽ファンで、当時熱中していたのがワーグナーです。そして、1904年にドイツのバイロイト音楽祭に行こうと、車で出かけました。当時は、車で英仏海峡を渡る方法がありませんでしたので、船を借りて、このように船で自分の車をフランスのディエプというところに運びました。この写真は、着いたばかりのところですね。これは危険な旅路でもありましたが、何度もエンストを起こしながら、何とかバイロイトにたどり着いて、《トリスタンとイゾルデ》《タンホイザー》、そして《ニーベルングの指環》などを実際に観たわけですから。そして、これがきっかけで、オペラ・フェスティヴァルをサセックスで始めようということになりました。



港で船上からクリスティ家の車を荷下ろしする光景

その前に、まずオルガン・ルームでいろいろなコンサートを始めたのですが、しばらくたってわかったのが、どうもこのオルガンがちょっとぐあいが悪いということです。これは、大聖堂にすえつけるような大きな本格的なもので、そのストップの数は、ウェストミンスター寺院にあったパイプ・オルガンよりもたくさんありました。ところがこの部屋はそんなに大きな部屋ではないわけです。ですからその大音量、振動のために天井がはがれ落ちたぐらいだったんです。

ということで、オルガンの演奏会はやめにして、オーケストラでいろいろなコンサート、あるいはオペラの抜粋などを始めたのが1920年代です。それは主に祖父の友人や近隣の人たちなどアマチュアの音楽家でやったものでした。

祖父のジョンは、そういうコンサートに自分でも加わるのを大変楽しみにしていました。自分で歌を歌うこともありましたが、シンバルを担当しました。それから、《ニュルンベルクのマイスタージンガー》のおどけたベックメッサー役を演じたときは大当たりで、グラインドボーンのメイドの1人が、それでヒステリー状態になって、担ぎ出して手当が必要になったほどだったそうです。

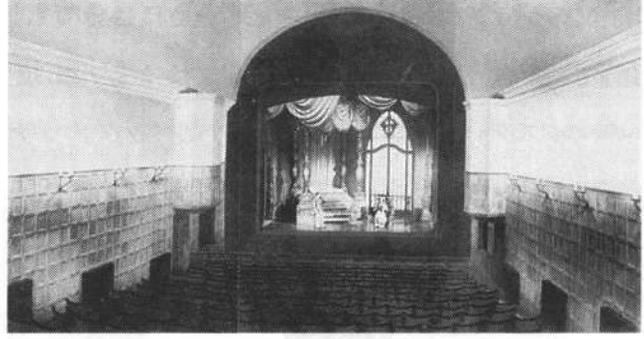
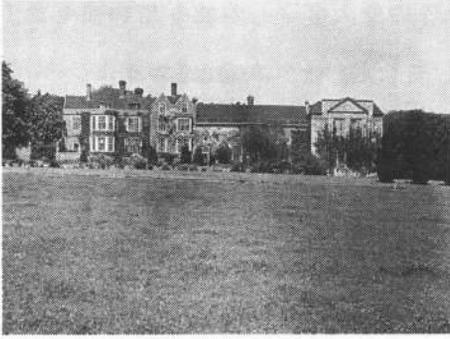


ベックメッサーに扮する
ジョン・クリスティ



グラインドボーンに招かれた当時の
オードリー・ミルドメイ

そのうち、ときどきはプロの歌手も呼んで水準を高めようということになりました。そうしたことの1つが、1930年、若いソプラノのオードリー・ミルドメイという人を《後宮からの逃走》のブロンデの役で呼んだときでした。祖父は彼女を、敷地内を案内して回り、寝室にも案内しまして、打ち明けたんですね。「ここが、私たちが結婚した後、一緒に寝る部屋だよ」と。そして6カ月後にほんとうに2人は結婚しまして、「じゃあ、毎年オペラをやろう」ということになりました。祖父のジョンは、オルガン・ルームを拡張して、そこに小さなステージをつくらうと考えたのですが、祖母のオードリーは、これは今なお語り草になっていまして、こう言ったそうです。「どうせやるんだったら、ちゃんとしたものをつくりなさい」。ということで、この庭のところに300席の劇場をつくったわけです。左がももとの屋敷で、その右隣がオルガン・ルーム。そして右側が、フライタワーができる前の劇場なんですね。



劇場を併設したグラインドボーンのクリスティ家屋敷 屋敷に併設された劇場の舞台と客席

この建設を担当したのは自分の建設会社だったわけですが、その後、今度は景観というか、庭をつくる作業にも当たります。

この祖父母は名コンビで、祖父は理想主義というか、いろいろ発想が豊かでした。ところが祖母はなかなかしっかりとした現実派であり、彼女のおかげで、祖父の考えがあまりに突拍子もないものにならなくて済んだわけです。

ということで、劇場が始まりました。そして次は、チームを組まなくてはいけないということになるのですが、それに当たっては歴史の偶然も幸いました。指揮者としてアプローチしたのが、この写真でピアノに向かっているフリッツ・ブッシュ^{*4}です。そして芸術監督がカール・エバート^{*5}でした。2人ともドイツ人で、当時のナチス・ドイツの現状に不満だった人です。そういうわけで、中には「ヒトラーがつくったもので唯一いいものがあつたとすれば、それはグラインドボーンだ」と言う人もいるぐらいなんです。こうして2人がナチス・ドイツを逃れてやってくることになりました。



指揮者のフリッツ・ブッシュ（右）と
芸術監督カール・エバート（左）

ブッシュもエバートも既に著名でしたが、このイギリスの突拍子もないような変な企画に、最初は尻込みしたそうです。そこで彼らは1つの条件を突きつけました。それは、この主としてはジョンでいいけれども、その芸術面、音楽面に関しては、すべて私たちに任せてくれということでした。

それから、ブッシュは祖母のオードリーのオーディションをぜひともと言ひまして、幸いなことに祖母を大変気に入りました。ですから、1934年のオープニングは、《フィガロの結婚》でしたが、祖母はスザンナの役で出ました。祖父は、最初はワーグナーをやりたかったんですね。でも、モーツァルトのほうがグラインドボーンの親密な感じのする環境には適していると説得を受けたわけです。



1934年のオープニングを飾った《フィガロの結婚》でスザンナを演じたオードリー・ミルドメイ

カール・エバートは、イギリスにおけるオペラ制作の革命を引き起こします。リハーサルに時間をたっぷりかけました。またドラマの面、デザイン面を重視したわけです。この写真は1950年代のデザイナーの1人であるオリバー・メッセル*6と彼が話をしているところです。



芸術監督カール・エバートと（左）
舞台デザイナーのオリバー・メッセル

一方、音楽面で言うと、フリッツ・ブッシュは完全主義者でした。ですから、音楽の非常に細かいところまで正確さを求めました。ですから、彼らが今のグラインドボーンの水準を築いた人たちなのです。私の祖父のモットーは、「自分たちのできる最高のものではなくて、世界の最高のものを」ということでした。

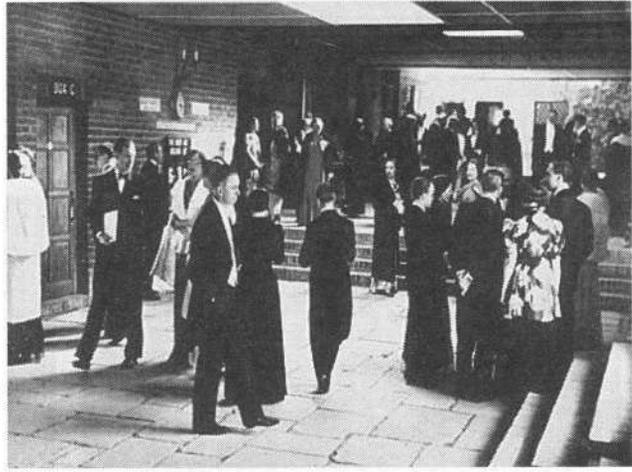
ちょっと昔の写真を紹介しますと、これはオペラのメンバーが自転車で到着しているところです。オルガン・ルームの後ろから見たところで、今、指したところがフライタワーです。右は昔の駐車場です。その次が、観客が休憩のときに湖の近くでピクニックをしているところです。右は劇場ホワイエですが、祖父は皆さんに黒いタイを着用するよう、お願いしたんですね。これはアーティストに対する尊敬の念をということ、今も、大半の人がその伝統を引き継いでくれています。その次が1947年のベンジャミン・ブリテンの《ルクレチアの凌辱》の世界初演*7です。



自転車で通うオペラのメンバー。背景は
オルガン・ルームとフライタワー（左端）



ジョン・クリスティ当主時代のグラインドボーン
の駐車場



写真左上：当時の観客のピクニック風景

写真右上：当時の劇場ホワイエ。タキシードにブラック・タイ、イブニング・ドレスで集う観客

写真左下：1947年にグラインドボーンで世界初演されたブリテン《ルクレチアの凌辱》

1949年に、モラン・カブラ*8が、ルディ(ルドルフ)・ビング*9の跡を継いで総監督になりますと、フリッツ・ブッシュの後、音楽監督としてヴィットーリオ・グイ*10が就任します。ここで、ロッシーニがグラインドボーンのレパートリーに入ってきます。1950年、フェスティバル協会というものができて会員を集め、会費を募ることになりました。また、プログラムを印刷するようになりましたので、これで広告収入が入ってくるようになりました。

私の父、ジョージ・クリスティ*11が祖父を継いだのは、1958年。父は当時24歳。その4年後に祖父は亡くなり、その後40年ぐらい、自分の両親の築いた音楽祭をさらに大きくしていきました。その間、その時々の人の特徴も出ていたわけですが。



フリッツ・ブッシュの後を引き継いだ、
グラインドボーン音楽祭音楽監督時代の
ヴィットーリオ・ガイ



24歳でグラインドボーン音楽祭の
経営を引き継いだジョージ・クリ
スティ

1970年代、ジョン・コックス^{*12}が芸術監督を務めました。この写真はデザイナーの
デイヴィッド・ホックニー^{*13}とストラヴィンスキー作曲《放蕩者のなりゆき》に関して相
談しているところです。私が大変大きな感銘を受けた最初のオペラは、10歳ぐらいのと
きで、1973年の《フィガロの結婚》です。キリ・テ・カナワ^{*14}が伯爵夫人、フレデリ
カ・フォン・シュターデ^{*15}がケルビーノ役でした。



芸術監督ジョン・コックスと
舞台デザイナーのデイヴィッド・ホックニー



1973年に制作された、グラインドボーン音楽
祭《フィガロの結婚》。左がケルビーノ役の
フォン・シュターデ、右は伯爵夫人役のテ・
カナワ

1970年代後半に、ジョン・プリチャード^{*16}に続いてベルナルト・ハイティンク^{*17}が
音楽監督に就任します。それからブライアン・ディッキー^{*18}が総監督となり、ピーター・
ホール^{*19}が芸術監督になりました。

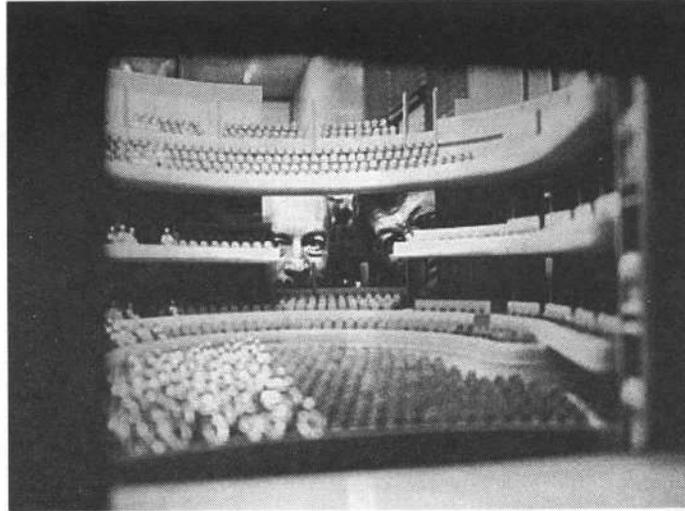
その後、1980年代、1つの黄金期を迎えます。その後もモーツァルトなどを続けま

したが、同時にベンジャミン・ブリテンの《真夏の夜の夢》のような公演もありました。あるいは、これもまたベンジャミン・ブリテンの《アルバート・ヘリング》です。当時、《ポーギーとベス》は新進のサイモン・ラトル*20を登用し、これがまた大きな反響を呼び、ヤナーチェクもこの時期にレパートリーに加わりました。



写真左上：グラインドボーン音楽祭、ブリテン《真夏の夜の夢》より
写真右上：グラインドボーン音楽祭、ブリテン《アルバート・ヘリング》より
写真左下：《ポーギーとベス》を振って喝采を浴びた、当時の新進サイモン・ラトル（右から2番目）

そして、1980年代の終わりごろになると、この古い劇場が、新しいいろいろな技術上の要求に答えるのが精いっぱいという状況になってきて、また、チケット需要の大きさに比べてホールが小さく、とはいっても当時は850人を収容できるところまで大きくなっていたのですが、できて60年で老朽化も進み、雨漏りなども起きていました。そういう中、父は一大決心をします。これまでの劇場を取り壊して新しいものをつくろうというわけです。そして、コンペで、マイケル・ホプキンス・アンド・パートナーズMichael Hopkins & Partnersというところが建築を担当することになりました。これは父が、新しい劇場の模型を見ている写真です。



改築に向けて新しいグランドボーン劇場内部の模型を
のぞき込む、ジョージ・クリスティ

新しい建物にするにあたっては、周りに溶け込むようなものでなくてはならない。と同時に、また、現代的でもなくてはならないということでした。客席は大きくするけれども、これまでの客席と舞台との一体感を損なわないようにということです。それから音響も世界最高水準のものでなくてはならないと。休むことができるのは、1シーズンだけという状況の中でした。大きなかけでしたけれども、父は、グランドボーンが21世紀まで生き残るに当たっては、これがどうしても必要なことだと思ったわけです。

タイミング的には完璧で、1980年代後半に必要な3,400万ポンド*²¹ (約81億6,000万円) 集まるのですが、そのかなりの部分が法人会員から集まりました。ということで、1992年、1993年の不景気の頃でしたが、昔の劇場と同じ場所にこれを建てたわけです。

次は昔の劇場の最後のガラ・コンサートのときの写真で、真ん中が私の母、左側が歌ったジャネット・ベイカー*²²です。このときはチャールズ皇太子が来て、さらに100万ポンド (2億4,000万円) が集まったんです。



グラインドボーン改築前、最後の寄付を募るガラ・コンサートで。左からメゾ・ソプラノのジャネット・ベイカー、ガス・クリスティの母、チャールズ皇太子

劇場は時間どおりに、そして予算の枠を超えずに、1993年に完成しました。そして、いろいろな建築賞をもらいました。現代的ではありますが、昔の雰囲気も今なお残している建物です。ただ、客席と舞台が位置的に入れかわりました。写真右側に出ているのがフライタワーで、右端が客席です。今では客席からそのまま庭に出て行くことができます。芝生のところから見える感じは、前とほとんど同じです。この芝生のある庭は、天候がよくなくてはいけませんが、ピクニックに最適です。休憩が75分ありますので、この間、食事がとれるわけです。周りに羊がいますが、柵のような部分があって、越えられないようになっているので、こちら側にはやってきません。



芝生のある庭から見た劇場。
オペラの休憩中にピクニックを楽しむ観客たち



客席部分（右端）からも、すぐ外の庭園に出ることができる

これが家から見えるサセックスの田園風景を、周りの丘の上から見たところで、敷地は、ごらんのように谷のようになっているところです。こういうことができるのもグラインドボーンの魅力の1つです。単にオペラを観に行く以上のものがここにはあります。ですから、夜ちょっと、という感じではなく、午後ずっとお休みにしなくちゃいけない。旅行なんです。夏の1日の休暇という感じです。



グラインドボーンの劇場を丘の上から見たところ。
背後には広大なサセックスの自然が広がる

この新しい1,250の客席は、改築前に比べて50%の拡張ということになりますが、それでもまだ客席と舞台の一体感はあるわけです。これはステージから見た客席です。昔の劇場より、客席の一番後ろは舞台に近づいています。馬蹄形にしたからなんですね。



改築されたグラインドボーンの劇場内部、
馬蹄形に配置された客席



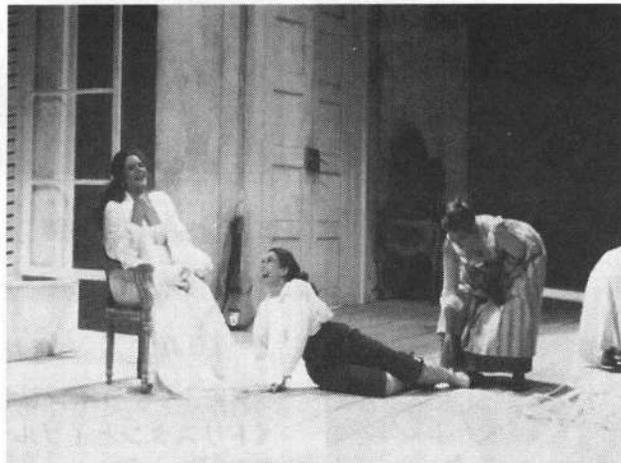
1,250席に増やされた客席。舞台袖から



舞台から後方客席まで、
一体感ある客席

音響も大幅に改善しました。エアコンはもちろん完備して、足の前の余裕など、座席もゆったりとしています。これは今、欠かせないことです。ちょうど皆さんの今の状況がそうではないでしょうか。素材は主に木を使い、ほかコンクリート・ブロックとレンガです。

オープニングは1994年5月28日でした。これは古い劇場がオープンしたちょうど60年後です。しかも同じオペラ《フィガロの結婚》でした。歌っているのは祖母ではなくて、伯爵夫人はルネ・フレミング*²³でしたが。



グラインドボーンの劇場改築後、オープニングを飾った
《フィガロの結婚》。左が伯爵夫人役のフレミング

父親が理事長を引退したのが1999年12月31日、彼の65歳の誕生日でした。彼は、それまで40年間、いろいろと気難しい音楽家などを相手にしていましたから、これでほっとしたと思います。そして、私の新しい総監督が、ここにおりますデイヴィッド・

ピッカードで、新しい音楽監督がウラディーミル・ユロフスキ*24です。



現在の音楽監督ユロフスキ(左)と総監督ピッカード

最近の作品をちょっと紹介しますと、これが《トリスタンとイゾルデ》で、このリバイバル上演もあります。《ペレアスとメリザンド》は非常に贅沢なセットですね。最後に《コジ・ファン・トゥッテ》。去年もやりましたけれども、ことしもまたやります。



写真左上：グラインドボーン音楽祭制作
《トリスタンとイゾルデ》より

写真右上：グラインドボーン音楽祭制作
《ペレアスとメリザンド》より

写真左下：グラインドボーン音楽祭制作
《コジ・ファン・トゥッテ》より

ということで、私からは以上です。駆け足でしたけれども、グラインドボーンの世界の歴史でした。続いてデイヴィッド・ピッカードです。(拍手)

【ピッカード】 さて、今、グラインドボーンの大変な歴史、これまでの70年の歩みを聞いていただきました。では、ジョン・クリスティがつくった劇場、今は昔とどう違うかという、根本的なところは全然変わっていないと言えるでしょう。2007年も、1937年と変わらないわけです。変わったと言えば、規模が大きくなったということ。それから21世紀の新しい状況に適応していかななくてはならないという部分でしょうか。

1934年当時、座席は330席。非常にすばらしい環境でしたが、非常に暑かったわけですね。今では1,200席以上、エアコン付きの非常にいい状況になりました。

ことしの夏のフェスティバルでは、6つのオペラで75公演を予定しています。バハからベンジャミン・ブリテンまで、いろいろなオペラです。当初第1回目のフェスティバルでは、モーツァルトの2つのオペラをわずか12公演の上演でした。さらに、秋のツアーではイギリスの6都市を訪れることになっています。2007年は全部で120公演の予定です。

このように大きく変わった部分もありますが、グラインドボーンの基本性格は、今なお昔と同じで、それは、同じ価値観を私たちが変わらずに維持しているということです。

そして残る私たちの性格の4つをここで挙げますと、まず民間の支援で成り立っていること。2つ目が若手を育てること。3つ目が芸術的な質の高さ。そして最後に革新的であり、将来に目が向いていることです。これらは、創設者のジョン・クリスティも認めるところで、これからもう少しそれらを詳しく見てみましょう。

グラインドボーン・フェスティバルはできてからずっと、民間資金の運営によります。ごく一部は公的資金も、特にイギリス・ツアーに関して頂く部分もありますが、私たちの収入は、まずチケットの売上であり、会員からの会費であり、そして、協賛、寄付などの収入であるわけです。時には、もっと公的な援助をもらったほうがいいのではないかという話も聞かされます。そのほうが財政的に楽になるのではと。しかし私は、今のままのほうが組織としては強いものになれると考えています。財政的な独立性があると、芸術上も独立性が保てるからです。出資者の意向に影響されずに、自分たちで独自に判断できるということですね。そして財政面に対する責任も生まれます。私たちが自立しなくてはならないということになりますから。

オペラというのは大変お金がかかります。そうした中で、どうして我々はやっていけるのだろうかという話をちょっとしたいと思います。

まず第1に、経費をできるだけ抑えていることです。フルタイムのスタッフは、およそ

100人です。また我々が使うアーティストは、歌手だけでなく、コーラスもフリーランスです。それから2つのオーケストラにしても同様です。1つはロンドン・フィルハーモニー管弦楽団London Philharmonic Orchestra、もう1つはエイジ・オブ・エンライトウメント管弦楽団Orchestra of the Age of Enlightenmentですが、そういう形でコストを抑え、その分、オーケストラそのものにお金をかけるようにしているわけです。

2つ目に、ギャラをかなり低めにしていることです。これは相場よりもかなり低いです。歌手たちは、一般にこれを理解してくれています。私たちが国などの公的資金をもらっていないということもありますし、グラインドボーン環境のよさゆえに彼らは納得してくれるのです。しかし、一番重要なのは、私たちが収入を得るという部分ですから、何とか自分たちの収入レベルを維持していかななくてはならないプレッシャーがあるわけです。

フェスティバルに関して言えば、収入には3つあり、第1にチケットの売上、第2に会員からの会費、そして第3に協賛や寄付です。

まず、チケット収入ですが、これがフェスティバルの収入の70%ぐらいを占めます。チケット価格はイギリスの相場から言うとかかなり高めではありますが、私たちの公演の客席稼働率は95%と非常に高いレベルです。

次に会員の面ですが、私たちが75公演をこなすことができるのも、グラインドボーンが単なるオペラを観る場所というだけではなく、先ほどの話にもあったように、これは1つのできごとで、イベントなんだということです。我々を一番支えてくれているのが会員ですが、これには法人会員と個人会員があって、我々のチケットの75%を彼らが引き受けています。ですから、彼ら会員には、チケットを得る上で優先権が与えられていて、一般の人たちの手に入る前にチケットが売り切れてしまうこともあるぐらいです。しかしながら、一般の人にも十分チケットが届くチャンスはあります。今ではさらにインターネットを使った予約もできます。これは毎年3月に始まっています。個人会員の会費はそれほど高くなくて、年会費が150ポンド*25(36,000円)ですけれども、会員になるまでが結構大変です。一番長くて20年待たされたりしますが、その長い列を飛び越える方法もあります。それは出資会員になるということです。出資会員になると、今度はチケットを得るための最優先権などが与えられるのです。

ということで、3番目は寄付・協賛ですが、このような寄付や協賛で、我々の公演の下支えをしている、あるいはちょっとお金の足りないところをそれで補うわけです。我々が目指している額は240万ポンド(5億7,600万円)ぐらいです。この部分でどれだけ

お金が集まるかは、イギリスの社会、経済の状況にも影響を受けます。今、法人よりも個人の傾向もありますが、資金的援助を必要としているのは別に芸術活動だけではなくて、学校や病院、医学関係の慈善事業など、寄付を募るところはほかにもいろいろあるわけで、我々の競争相手です。そういう意味で、私たちグラインドボーンもよほど頑張らなくては いけません。

しかしながら、個人に頼る部分が増えていると言っても、それはそれでいい面があると思っています。それは経験でも言えます。個人というものはちゃんと対応すればなかなか忠誠心があるというか、移り気ではありません。企業のように、買収や合併に影響を受けたり、株主に責任を果たさなくてはいけないこともないわけで、一番重要なのは、個人の場合、グラインドボーンを心から愛してくれていることです。グラインドボーンがもっと盛んになるには、自分たちの支援が鍵を握っているのだと自覚してくれていることです。

ということで、私の話の次の部分、若手の起用という部分に移ります。

新人、若手の発掘、そして彼らを育てるということ。これはグラインドボーン音楽祭が始まったころからずっとやっていることです。コヴェント・ガーデンのようなところと違って、こちらからスターを探すところではない。逆に、スターが生まれる場所なのです。これまで、国際的に有名な歌手の多くが、イギリスでのオペラのデビューをグラインドボーンで果たしています。幾つか紹介しますと、1960年代のルチアーノ・パヴァロッティ^{*26}、モンセラート・カヴァリエ^{*27}、あるいは1980年代のロベルト・アラニーヤ^{*28}、それから1990年代ではルネ・フレミング、アンドレアス・ショル^{*29}、それから3年前はロランド・ビリヤソン^{*30}です。国際的なアーティストにとっても、まずイギリスでのデビューをといるときに、グラインドボーンがうってつけなのです。小さめの劇場で、音響はよいし、リハーサルの時間がたっぷりとれます。それから、イギリスの歌手にとっては、もっと若いころからの自分たちのキャリアのスタートの場としてグラインドボーンは適しています。私はグラインドボーンの合唱団は、世界でも最も優れた合唱団の1つだと思えますが、ここには才能のある若い人がいっぱいいます。そして、やがては国際的に巣立っていく人たちなのです。そういう合唱のメンバーで、グラインドボーンから出発した人たちが、例えばトマス・アレン^{*31}とか、ジャネット・ベイカー、フェリシティ・ロット^{*32}なのです。

毎年、私たちはイギリスの音楽大学を卒業する中から、最も優れた歌手を400人ぐらいオーディションします。さらに、その中で最高の人たちを私たちは選ぶわけです。そし

て、そうした人たちが合唱団に加わって、次の年はいなくなる人もいるし、また戻ってくる人もいますが、毎年少なくとも50%は新しい人たちです。もちろん、中には合唱団に残る人もいますが、多くの人が数年後にはソリストとして巣立っていきます。合唱団の中にいるときに、ソロの代役の勉強をするわけです。ですから、その役に当たっている歌手の具合が悪いようなときに、すぐ代役を務められるような勉強のチャンスがそこにあるわけです。そして、すべての代役の人たちは、グラインドボーンのマネジメントの前でオーディションを受けることができ、そこで成績がよくて気に入られれば、イギリス・ツアーで何か役を与えられる。あるいはひょっとすると、将来夏のフェスティヴァルで何か役を与えられるかもしれないということなのです。ですから、非常に才能がある人たちは、自分の登竜門といえる道がここに開けていくわけです。最初は合唱団のメンバーになり、オペラの代役として勉強し、そして夏のフェスティヴァル、あるいはツアーで、最初は小さな役かもしれませんが、やがては主役の座も与えられるかもしれないということです。

ということで、グラインドボーンでは、私たちは絶えず高い水準を目指しているわけですが、先ほどの話にも出てきました創設者のジョン・クリスティは、自分たちのできる最高のものを目指すのではなく、世界最高のものを目指しました。そのもとになっているのが、リハーサルにたっぷり時間をかけられることです。時間がたっぷりあって、ひまだからほかの仕事をとすることは許されません。ですから、そういう部分も、私たちの新しい音楽監督、ウラディーミル・ユロフスキがグラインドボーンに惹かれた理由の1つだと思います。29歳という若さで就任しましたが、彼は既に引く手あまたの人です。しかし、グラインドボーンでは、自分のオペラでの経験をより確実なものにでき、自分のやりたいことが許される、周りからサポートが受けられる環境だということがわかってのことだったと思います。それからまた彼にとって魅力だったのは、2つの非常に性格の異なるオーケストラを使うことができるということだったと思います。一方にロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、そして片や古楽器を使うエイジ・オブ・エンライントウンメント。一方では現代の楽器を使い、一方では古楽器を使うというその柔軟性、フレキシビリティが魅力だったのだと思います。

そして、その高い水準は、単に我々が耳にするだけではなく、目にするものにもなくてはならないわけですが、私たちは、自分たちの技術部門の水準の高さを大変誇りに思っています。それぞれのプロダクション1つ1つにたっぷり予算をかけようと思っています。そして、我々の監督、デザイナーらの夢ができるだけ実現するように、彼らのやりたいよ

うにやれるようにしています。セットは外注ですが、衣裳や小道具などは自家製です。これは私たちで、心を込めて丹念につくります。例えば《カルメン》のエスカミーリョの闘牛士の格好や、《こうもり》の中で出てくるプラスチックのシャンパンのボトル、これは何千個とつくりますが、あるいは、《マクベス》で使うタータンのキルトも手製のいろいろなタータンを使って、160種類もあるわけです。

このところ我々が最も成功を収めたものの1つが、デイヴィッド・マクヴィカー^{*33}演出の《ジュリオ・チェーザレ》です。これはイギリスではしばらく公演の機会がなかったヘンデル作品であり、その中でクレオパトラ役のダニエル・デ・ニース^{*34}の若い才能が生かされている。我々はこうしたプロダクションを通して、いろいろな細かい部分へのこだわりを持ち、一大スペクタクルで聴衆を魅了するものができたと思っています。それでは、少し抜粋を紹介いたします。

(DVD上映：2005年グラインドボーン音楽祭制作、
ヘンデル《ジュリオ・チェーザレ》より第2幕から「優しい眼差しよ」)

【ピッカード】 最後に、手短にグラインドボーンにおける革新性に触れたいと思います。グラインドボーンの歴史を見てみると、これまでもほかならちよっと尻込みするようなリスクもあえておかしてきたという部分があると思います。

例えばヴェルディの《マクベス》、1938年のイギリス初演も1つの例です。あるいは、芸術団体として初めて、刑務所の中で自分たちの活動をしたのが1957年です。これも我々が団体として他に先駆けたことです。あるいは人々の評判のたいへんよかった劇場を取り壊すといって、支援してくれている人たちの怒りを買うかもしれないようなこともやったわけです。これは1994年に新しい劇場を建てたときのことで、

そういうわけで、我々が何か先頭に立ってやって、ほかの人が私たちのまねをして後についてくる、というような1つの傾向があるわけです。

では、21世紀の初めということで2つ、私たちの革新的な部分を取り上げましょう。1つは私たちの教育活動、啓発活動、2つ目が新しいメディアということでお話ししたいと思います。

グラインドボーンは、実は昔から教育を重視していたところがあります。オペラという芸術様式を皆さんにもっとよく理解してもらおうということがあったわけです。しかし、

教育部門をつくったのは、ようやく1986年でした。しかし、それは単に講演会を開いたりして、オペラのお話を既に私たちのファンである人たちに対して聞かせるというだけではなく、もっと幅の広いファンの開拓ということです。それに関しては、音楽教室などを開きますし、また、新しい作品の委嘱なども行うわけです。

私はこれを幸いなことだと思いますが、教育というと、音楽教室などでも、オペラの筋を説明して、抜粋を聴かせて終わりという時代はもう終わりました。現在では、新しい人たちにクリエイティブな作業に参加してもらっています。若い人たちに歌ってもらい、ダンスや演技も、デザインもしてもらおうということ。これは取りも直さず、それぞれの持つ能力をもって、オペラという活動そのものに加わってもらおうことなのです。

その一例が、これから紹介するプロジェクトだと思いますが、去年の3月、何とヒップ・ホップ版の《コジ・ファン・トゥッテ》をつくりました。これはモーツァルト生誕250年を記念しての作品でしたが、若者たち、これはロンドンとブライトンの人たち、それからクラシックのオーケストラの若い人たちも加わり、そこにヒップ・ホップ系のアーティストとDJが加わって、ストーリーとしてはダ・ポンテの原作に従いながらも、現代版の台本に書き改めました。場所も、21世紀のイギリスの都心部の団地という設定です。

どういう話かといいますと、グリエルモとフェランドが、実はロック・バンドのメンバーということになっています。そして、彼らはツアーに出るふりをして、その間、自分たちのガール・フレンドが浮気をしないか試すという設定になっています。音楽的にはモーツァルトのもともとのスコアを使っていますが、そこにいろいろなヒップ・ホップの要素を混ぜているのです。そこにMCが出てきて、DJが加わって、ブレイク・ダンスあり、ビート・ボクシングありと、全く新しい音楽世界を展開しているわけです。

これで、クラシックが好きな人、ヒップ・ホップが好きな人、双方を怒らせてしまうかと思いましたが、幸いそういうことはなくて、2つのグループの融和がそこで可能となりました。そして、これまでと非常に異なる聴衆が、グラインドボーン3回の公演のために来てくれました。そして、そこにやってきた若い人たちの7割は、この劇場の中に初めて足を踏み入れたという人たちでした。そこを一部、紹介しましょう。

(DVD上映：2006年の教育プログラム 'School 4 Lovers'

ヒップ・ホップ版《コジ・ファン・トゥッテ》より)

【ピッカード】 確かにこれまでのものと違いますね。しかし、我々はこの新しいものが非常にいいのではないかと期待しています。確かに新しいものを手がけるということは、リスクな部分もありますが、よく考えてみると、オペラというのはいろいろなエキサイティングな違う様式のを混ぜ合わせる部分があるわけですから、まさにオペラの醍醐味そのものということが言えると思います。

最後に、新しいテクノロジーをどう生かすかという話、これは新しいファンの開拓であり、また、我々のこれまでの誇るべき公演を後世に残すということでもあります。1934年に始まったグラインドボーン音楽祭は、今、78枚のレコードに録音されており、CDになったものもありますが、我々の仕事、21世紀の作品もまた残していきたいと思うわけです。それは音だけのもの、また映像も含めたものもあります。新しい技術を活用しながら、そういうものに対する所有権を得ていくということがまた重要になってきます。

これまでは、自分たちで権利を確保しなかったがために、貴重な私たちの録音が倉庫に眠ったままという状況がありましたが、この5年間、もっと私たちの権利が確保できるようになりました。その中で2つ、重要な動きがあります。まず第1は、1950年以降のすべてのグラインドボーンのオーディオの記録を調べて、そこから何か発掘できないかということ。そして、来年は我々の独自のCDレーベルの立ち上げを予定しています。そして、過去の古いものの例を挙げると、その中には例えば、ミレッラ・フレーニ^{*35}やルチアーノ・パヴァロッチィ、ジョン・サザーランド^{*36}が出演した作品もありますし、もっと新しい、最近の公演からもいいものが得られるはずなのです。

2つ目が、私たちが最近イギリスでオペラ・カンパニーとして初めて、オーディオ・ビジュアル的なものを自分たちで独自にプロデュースできるようになったということです。そうすると、それだけ自分たちで録音・録画できるものの数が増えますし、芸術面での自立性もそれだけ確保し、より多くの聴衆に届けることができるようになるわけです。

もちろん、そういうことは私たちだけではできません。そういう意味で、NHKなど、私たちに協力して下さる方々に大変感謝しているところです。彼らが、私たちに対して信頼感を持って下さるおかげで、世界のより多くの人々に私たちの作品を届けることができるようになるわけです。テレビ、それから今のところDVDが中心ですが、さらに将来に対する大きな可能性も秘めています。最近の6つの録音に対する新しい権利を、私たちは持っています。そうすると、今後新しいデジタルの流通路も考えられるのです。そ

れがまた、私たちの全く新しい、これからのデジタル戦略の1つの大きな基盤となっていくはずです。

そして、我々の所有するものを増やすということです。そうすることで新しいファンの開拓もできるようになり、例えば新しいデジタルのチャンネル、ビッグ・スクリーンディスプレイといったもの、ポッド・キャストであるとか、映画であったり、あるいは音楽大学や普通の大学に対するストリーミングといったようなこともできます。

ということで、時間が限られていますので、グラインドボーン音楽祭のすべてを伝えることはできなかったと思いますが、我々の話でその雰囲気は少しでもわかっていただけたらと思います。(拍手)

【司会】 クリスティさん、ピッカーードさん、そして通訳の中嶋さん、どうもありがとうございました。(拍手) 休憩後は、パネル・ディスカッションを開始したいと思います。ご協力、どうぞよろしくお願いいたします。

(休 憩)

第Ⅱ部

パネル・ディスカッション

【司会】 それでは、大変お待たせいたしました。ただいまからパネル・ディスカッションを始めたいと思います。先ほどの基調講演でお話いただきましたお2人に加えて、このパネル・ディスカッションでは、パネリスト、そしてモデレーターの方々をお迎えしております。それではご紹介いたします。まずパネリストのNHK音楽・伝統芸能番組部部長の長谷川芳弘さんです。(拍手)そして、モデレーターとして、オーチャードホールのプロデューサーで音楽評論家の黒田恭一さん。(拍手)そして、昭和音楽大学の石田麻子専任講師です。(拍手) それではよろしく願いいたします。

【石田】 それでは、公開講座の後半を始めさせていただきます。きょうは第Ⅱ部の「劇場を聴く」を含めるとほぼ満席の1,250人のお客様にいらしていただいています。今、黒田さんと長谷川さんともいろいろお話していたのですが、なるべくピッカードさんたちお2人に会場からの質問に答えていただきながら進めてまいりたいと思います。

まずは、パネリストのNHKの長谷川さんから、映像のご紹介とともに、お話しいただきたいと思います。その後、黒田さんのほうにバトンタッチをしながら進める形にしたいと思います。よろしく願いいたします。

【長谷川】 NHKの長谷川です。どうぞよろしく願います。

グラインドボーンは1994年に新劇場ができて、《フィガロの結婚》のリバイバルでオープニングを飾ったわけですが、実はそのとき、NHKが衛星生中継をしておりました。私はたまたまそのとき、グラインドボーンの現場に行き、その送り出しを担当したものですから、今回、広渡さんから「ぜひ来て話を」と言われて、出てまいりました。

この年にNHKは、ドキュメンタリーを制作して放送しました。その番組は全部で1時間半ぐらいあり、とても全部をお見せするわけにはいかないもので、12分半ほどに縮めたものをきょう用意してまいりました。まずそれをごらんいただければと思います。

(上映)

【長谷川】 ありがとうございます。この番組の案内は、当時のNHKの高島肇久解説委員でした。この番組では、観客の皆さんがブラック・タイで集合するオペラって何だろう、上流階級だけのものなのか、というのが1つのテーマだったのですが、結論ははっきりしていて、そんなことはないと思っております。

お手元の配布資料に、NHKが今までグラインドボーン音楽祭のオペラのどんな作品を放送してきたかという一覧表が入っていると思います。実は20タイトルぐらいあり、これは結構多いのではと思っております。

最初は1988年にブリテンの《真夏の夜の夢》、これは先ほど基調講演で写真が1枚出ていました、あの映像です。これをNHKが購入して放送したのは、衛星放送が始まってしばらくのころです。衛星放送は、当時は時間が山ほどあるけれども放送するものがない。どんなものを放送したらいいかというときに、一番いいのがクラシック音楽じゃないかと。これは長時間、それから衛星放送では非常に高音質、高画質というのが売り物でしたから、それまでの普通の教育テレビで放送しているよりは、はるかにいい音質で放送ができるということで、NHKではクラシック音楽に注目して、積極的に放送するようになっています。

1つの転機として、1994年にこの新劇場がオープンしたときに、じゃあ、これは衛星で生中継したらどうかということになりました。それまではウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤー・コンサート等はずっと生中継をしてきたんですが、オペラ・ハウスから生中継を実際にやることはなかなかできなかったんですね。それが、衛星回線を使って、映像もデジタル化した音声も衛星経由で送ります。NHKではBモードと言って、高音質の衛星生中継を積極的にやり始めました。それが94年の《フィガロの結婚》、それから同じ年の《エフゲニー・オネーギン》です。その後、衛星の生中継が1998年まで大体毎年のように行われていたのですが、1つの転機になったのは2002年です。ここから、今度はNHKが国際共同制作を始めました。先ほど総監督から話がありましたように、主にBBCワールドワイド、オーパスアルテ、そしてNHK、年によって違う場合もありますが、この3者が共同出資をして、オペラを収録する。これはイギリスでも、日本でも放送できる、それからDVD等になってオーパスアルテが発売するというような運びで、放送局とビデオ製作会社がタイアップしてビデオ化をどんどん進めました。

去年は《シンデレラ》が国際共同制作で、先ほど見ていただいた《ジュリオ・チェーザレ》は購入でしたが、昨年9月23日にハイビジョンで放送しました。それから《コジファン・トゥッテ》を2月17日にハイビジョンで放送する予定になっております。

NHKは、このグライントボーン音楽祭だけではなくて、バイロイト音楽祭やザルツブルク音楽祭にしても積極的に収録し、放送するようにはしているのですが、今、バイロイトは、たまたまユニテルという会社が不調になりまして、収録がほとんど行われておりません。ザルツブルクのほうはわりと活発ですので、例えば昨年のネトレプコの《椿姫》は非常に評判がよく、こうしたものをどんどん放送するようになっています。

劇場に行ってオペラを見ることはもちろん、普通の行為ですが、それは一過性のもので

あって、終わったところで皆さんの胸の中にしまわれて、それで終わりになるというものであります。それに比べて放送の場合、ビデオ化にしますので、先ほども話がありましたように、今度はそれがずっと永久保存され、例えば私どもが「60年前のあの公演はどんなだったんだろう」と想像しても、いいところスチール写真があるぐらいだったのが、ビデオ化されていると、非常にいい状態で、いつでも後の世代の人たちが追体験できるところで、NHKの存在意義があるのかなと思っております。こういう場でこの番組を紹介させていただいてほんとうに感謝しております。どうもありがとうございました。(拍手)

【石田】 ありがとうございます。NHKとグラインドボーンとの関係などをご紹介いただきましたが、引き続いて黒田さんにバトンタッチして、お話しいたきます。

【黒田】 僕は、1987年、ですから改装される前のグラインドボーンということになりますが、1度行っただけです。そのときは、今のNHKが制作されたビデオにも出てきましたけれども、ブラック・タイでということが盛んに言われまして、当時僕はブラック・タイというものがどういうものかもよくわからない。なので、洋服屋さんに行って買ってまいりました。家に帰りましたら、女房には「何だか白髪の七五三みたい」だとか、妹には「ウエイターみたいだ」とか散々なことを言われて、とても由緒あるフェスティバルに行くということで緊張している上に、さらにブラック・タイがくつついちゃったものですから、僕はかちかちになってグラインドボーンにまいりました。

ところが、着いてどうしていいかわからなくて庭園をうろうろしておりましたら、さっきビデオでも紹介されたようなイギリスの老婦人が、「日本からいらしたの？」と声をかけてくださいました。「遠いところ、お疲れでしょう？」と。それで一気にどっと緊張が解けて、最初のグラインドボーン体験はとても心豊かに、楽しくすごすことができました。

そのとき聴いたのが、ハイティンクが指揮したリヒャルト・シュトラウスの《カプリッチョ》という最晩年の作品です。それともう1つ、サイモン・ラトルが指揮した《子供の呪文》と《スペインの時》というラヴェルの作品。

このとき偶然、《スペインの時》と《子供の呪文》の装置を担当したモーリス・センダック^{*37}という有名な絵本作家がいました。僕は昔から、彼の書いた『かいじゅうたちのいるところ』という作品がとても好きで、根っからミーハーなものですから、彼がレストランでご飯を食べているときに偶然見つけまして、プログラムにサインなどいただきました。センダックの演出した《子供の呪文》も《スペインの時》もすばらしい作品ですが、同時に、僕はビデオで見ているだけなんです、グラインドボーンには、モーリス・センダック

クの『かいじゅうたちのいるところ』をオペラ化したものもあり、これはとてもおもしろい。《ヒギレットィ・ピギレットィ・ポップ》という、犬が出てくるかわいいオペラもあつたりして、そういういわゆる名作ではないもので、とてもすばらしいステージをつくっているところが、グラインドボーンのととてもユニークなところですよ。

僕が伺ったときに、ほかの劇場と決定的に違うと思ったのは、ほかの劇場はちょっと気持ちが悪く構えたままで行ってしまうんですけど、グラインドボーンでは、よそのお宅の応接間におじゃましているような、温かく迎えられたような感じがするのと、先ほどから何回もお話に出ていましたけれども、客席と舞台がとても親近感を持って、すごく近く感じられます。これはとてもすばらしいことで、オペラはとてもお金がかかるから、昨今、特に4,000人も入る大きなホールで上演されたりしますけれど、大きいホールで上演されて後ろのほうで見ますと、ほとんど何をやっているかわからない。バッタが何かやっているみたいな感じになることもありまして、これはあまりオペラを実感することにならないという気がいたします。費用がかかるのを、その分入場料収入でどうこうしようとするところになるのは頭では理解できるんですけど、オペラというのは、このテアトロジューリオぐらいのところが最も理想的だと思いますし、せっかくグラインドボーンからおいでになっているお2人がいらっしゃるので、もし、グラインドボーンが日本公演をなさるのであれば、まず最初にここでやっていただきたいということをお願いしたいと思うんですが、いかがでしょうか。(拍手) これだけ証人がいらっしゃるので。

【ピッカード】 どうやら何か言わなくちゃいけないような雲行きになってきたようですが、その前に、先ほどのお話の中で、グラインドボーンが非常に温かく迎えてくれるような雰囲気があったという話を聞いて、うれしく思います。

それから、それに関してはエピソードをちょっと紹介したいと思います。私のプレゼンテーションの中でそれを紹介したかったのですが、時間がなかったもので、ここで2分ほどいただけますでしょうか。

数年前のことですが、お客さんの中の1人が、グラインドボーンにある湖で、ワインを冷やしていたんですね。それを取りに行ったか何かで、転んで湖の中に落ちちゃったんです。ところが、衣装係が彼のために別のディナー・ジャケットを用意してくれまして、そればかりではなくて、帰るときには彼ご本人のジャケットをちゃんと乾かして、アイロンもかけて、お家にそのまま着て帰れるようにしたというエピソードがございます。

おそらく、日本の方々には心づくしが大変細やかですから、それぐらいのことはなさって

当たり前かもしれませんが、イギリスでは、ここまでやってくれるというのは実に異例のことなのです。

【クリスティ】 グラインドボーンに関して非常に優しい言葉をいただきまして、ほんとうにありがたく感じます。そして、客席と舞台との一体感と言いましょうか、非常に親しい感じがするとおっしゃいました。そういう気持ちも気づいていただいて、うれしく思います。私も同感です。オペラというものをやるに当たっては、サイズがあるということですね。それに関する黒田さんの考えとは、私は全く同じだと思います。

私は、父親の二の舞は嫌ですので、今の劇場で、私の生きている間はやり続けるつもりでおります。

【黒田】 グラインドボーンというのは僕より上の世代の音楽ファンにとりましても非常に身近な音楽祭でして、先ほどもお話に出ましたが、世界で最初に録音された《フィガロの結婚》と《ドン・ジョヴァンニ》の全曲版というのは、グラインドボーンのスタッフ、キャストで録音されたものです。これは戦前、78回転のSPレコードで、日本には大した数も入っていなかったんだらうと思うんですが、でも、《フィガロの結婚》の全部を聴くという、LPが登場する前の世代にとっては、グラインドボーンの録音です。

そのことがありまして、グラインドボーンとモーツァルトのイメージというのは、非常に近い。先ほど出てきましたフリッツ・ブッシュとか、そういう指揮者たちの仕事が、モーツァルトを得意にしていた。それから、クリスティさんのおばあさんでいらっしゃる方、この音楽祭の発端になった方がスザンナのような、ああいうスープレットを得意にしていたということもありまして、《フィガロの結婚》や《ドン・ジョヴァンニ》を録音したり。また、先ほどご紹介がありましたが、NHKで頻繁にグラインドボーンの映像が流れて、遠いところで行われている音楽祭というよりは、とても身近に感じられるものでした。ただ、いかんせん、日本に引越し公演をなかなかされないの、皆さんで、できることならこのまま一緒に飛行機に乗って行きたいところですけども、なかなかそういうこともできませんので、向こうから来ていただくより仕方ないんじゃないかと。

【ピッカード】 そうですね。ぜひとも日本公演、実現できればと、実は思っているところであります。私たち、海外公演というのは比較的少ないんですね。4年前に、パリにまいりました。一番遠いところで香港だと思えます。

ガスも私も、先週、我々の音楽監督ユロフスキと食事をしながら、日本に行くことを話しました。彼もこのことを非常に喜びまして、彼が期待しているのは、私たちが今回イギ

リスに帰りましたときには、日本公演の契約書か何かを携えて戻ってくる姿だと思います（笑）。

【黒田】 僕は、ここで話がそこまで行くとは思っていなかったんですけども（笑）、グラインドボーンのすばらしいところは、オペラの楽しみ方というのはスターを中心に聴くような感じが、今、どうしても、日本のオペラの楽しみ方であるように思いますが、グラインドボーンオペラというのは、そこに超有名なスターがいるかどうかは別にして、しっかりアンサンブルができていて、例えばこのぐらいのホールで味わえると、オペラの醍醐味というのを感じられる。そういうオペラが一番大事な部分が、今まで日本にはあまり上手に紹介されていないような気がいたしますので、グラインドボーンオペラに来てもらうのが一番いいのではないかと。ほんとうにここで判をつかせたいような気持ちでおります。

【石田】 それでは、ご質問がたくさん来ておりますので、幾つか代表的なものを取り上げさせていただきたいと思っております。

「演目をどのように選ぶのですか」というご質問があります。会場の皆さんはお手元の資料に今年度のシーズン・プログラムをお持ちになっていると思います。新制作として、まず《マクベス》、またバッハの《マタイ受難曲》も挙がっております。もちろん、もともとオペラの作品ではないものです。ツアーで持っていったような《コジ・ファン・トゥッテ》や《ねじの回転》なども挙がっておりますけれども、こういった演目は芸術監督が中心になってお決めになるのか、その体制を教えてくださいたいのです。

【ピッカード】 そうですね。6つ演目を選ぶのは大変な作業ですけども、最初はいつも、まず新しいものを2つ、ないしは3つと考えて作業を始めます。ですから、次に具体的に「何を」ということになり、具体的に「だれを使って」ということになります。それを私とガスとウラディーミルの3人で話し合うわけです。

その中で、私たちが大切だと思っているのは、よくなじみのあるものが一方にあり、もう一方でちょっと予期せぬものを出すという、その組み合わせということを考えます。ですから、この夏で言えば、一方で《マクベス》ですね。これはよく耳にする。そしてこれはグラインドボーンでも長い歴史のあるなじみのレパートリーの1つ。そしてそれをウラディーミルが指揮をするというものであります。

そして一方、これに対比させたのが《マタイ受難曲》です。《マタイ受難曲》そのものはよく知られた作品ですが、これをオペラ・カンパニーがやるのは非常にめずらしいことで

あって、私たちにとっては1つの冒険です。《受難曲》をステージの上に乗せて、劇的に演ずるということ。ですから、フェスティバルの1つの務めとして、何か新しいことで聴衆に挑むということをここでやろうとしているわけです。

それから、残り4つは、以前手がけたものを再びかけるリバイバルの演目になるわけです。これは我々のレパートリーとしてあるものですが、それを選ぶに当たっては、またいろいろな理由がそこにあります。1つには財政的な事情でこの作品にしたいというようなときもあります。これは、一定のチケット売上が想定できるというような事情でありますし、あるいはまた、合唱のためにこの演目を入れておきたいということがあったり、指揮者のためであったり、それはいろいろ、さまざまな理由で選ぶわけです。

【クリスティ】 我々は、70年という長い歴史があるわけで、その中でどういう作品を選ぶかということに関しては、これまでグラインドボーンの中でもいろいろ流れがありました。どういう芸術監督であるかとか、どういう監督のチームがあるかにもかかわってくるわけですが、ウラディーミル・ユロフスキが音楽監督になって、ロシア物などが選ばれるようにもなりました。例えば、去年ではプロコフィエフの《修道院での婚約》ですね。

それからまた、バロック物がグラインドボーンには適しているところがあります。毎年モーツァルトもやりますが、ヘンデルをやったり、ことしの場合はバッハが出てきました。劇場の大きさからも、バロック・オペラが適している部分があります。デイヴィッドの話にもありましたが、グラインドボーンには2つの強みがあります。1つは若い人たちが合唱団からどんどん訓練を積んでいくということです。もう1つは、オーケストラが2種類あって、一方が古楽器を使うオーケストラであるということです。そういう意味でバロックにも適しているわけです。

最後にもう1つつけ加えるならば、演目を選ぶに当たっては、そこにさまざまな要因が絡んでいて、一言で言ってみれば、ジグソーパズルを解くようなものだということですね。

【石田】 ありがとうございます。

今シーズンのプログラムにも出ている名前、《コジ・ファン・トゥッテ》の指揮者、ロビン・ティッチアーティ*³⁸はたしか23歳でしたか、そういうとても若い指揮者を登場させていらっやいますね。

【ピッカード】 おっしゃるとおりです。若干23歳。

【石田】 指揮者に関してですが、2008年に大野和士さんが初登場すると聞いております。そのことについて教えていただきたいのです。それから「指揮者、有名な歌手、

演出家、こういった方のスケジュールはどのぐらい前から決まっているんですか」というご質問もあります。その辺をお話しいただけますか。

【ピッカード】　そうですね。大野和士さんも、そういう選択の1つのあり方の例になるかと思いますが、彼を指揮者として前から招きたかったわけです。私は彼の活躍にブリュッセルで何回も接しまして、昔から好きだったんですね。これを決めたのが2005年だったと思われまます。ですから、どのぐらい先かという、2008年のものを2005年に決めているような感じですが、マエストロ大野の場合には、《ヘンゼルとグレーテル》を考えたんですね。彼にはこういう後期ロマン派のものが適しているのではと、そして、彼のオペラでのイギリス・デビューにふさわしいのではないかと思ったわけです。

【石田】　では、会場からの質問をあと2つだけさせていただきたいと思います。

グラインドボーンの特徴として、若い歌手のオーディションがあると思います。今もそのオーディションは定期的にやっているのでしょうか。どういう形態でやっているのか、それは合唱団のためだけなのか、それともほかの目的のためにもやっているのですか。そういった、歌手のオーディションの状況について詳しく教えてください。きょうはこの後の第Ⅱ部「新劇場体験会」でも、日本人の若手歌手の声をデイヴィッドさんたち、それから皆様にもお聴きいただく機会を設けております。これが日本人の歌手のためにとってもいい機会になればという気持ちですけれども、実際にグラインドボーンではどのようにやっているのかということをお教えいただけたらと思います。

【ピッカード】　そうですね。私のプレゼンテーションの中では余りはっきりしなかったかもしれませんが、合唱団だけではなくて、そのほかの歌手のためにもオーディションをやっていますし、オーディションは定期的にやっているんですね。ですから、歌手として採用する、そして、オペラの役をあてがって歌ってもらう人のためのオーディションもやっている。そして、私たちはヨーロッパ各地を歩き来まして、いろいろなところでいろいろな人たちの声を聴くわけです。そして、エージェントを通じてそういう若い人たちを発掘していくということ。これも、私たちが若い才能をプールしていく1つの方法です。

【クリスティ】　幸い、私たちは非常に有名なキャスティング面での監督であるポール・モーという人を知っています。彼はパリの国立オペラにもかかわっている人ですが、世界で最も尊敬を集めるキャスティング・ディレクターなんですね。そして、彼のもとにはいろいろなエージェントから電話がかかってくる、「今、こういう人がいますよ」

という情報がどんどん入ってくる。彼は、アメリカのシカゴにもアドバイスをしているような立場の人ですが、そういうチャンネルを通じて、私たちは人を選ばせていただいています。

【石田】 ありがとうございます。ほかにも、「グラインドボーンにはスタンディング・ルームが設けられているけれども、この意義あるいは位置づけはどう考えているのか」、先ほどの、ヒップ・ホップの《コジ・ファン・トゥッテ》についてのご感想やご質問などがあるのですが、別の機会に取り上げさせていただくことになると思います。

最後にご質問というよりもアドバイスを受けた方がいらっしゃいますのでご紹介します。「6月に初めてグラインドボーン音楽祭にイギリス人の友人夫妻とまいります。イブニング・ドレス着用とのことですけれども、ピクニックを楽しみつつイブニング・ドレスというのはどのように過ごせばいいのか、ほんとうにぴんと来ないんです。どうしたらいいでしょう」と、困っていらっしゃるみたいです。1つだけ、アドバイスをくださいと申し上げた場合に、何かございませんか。

【クリスティ】 そのままのお姿で来ていただければ。

【ピッカード】 それから、天候がいい日であることが望まれます。

【石田】 会場からのご質問、ご意見をご紹介しましたけれども、時間が限られておまして申しわけございません。ここで黒田さんにバトンタッチをいたしたいと思います。

【黒田】 今の最後のご質問ですね。先ほどから再三2人もおっしゃっているんだけど、さっきからきれいな景色ばかり映るんですけど、これが雨が降っていたりすると、とんでもないことになっていまして、僕が行った片方の日は雨降り、建物の後ろに駐車場があるんですけど、泥沼で、とまるどころまで戻ったら靴が全部泥だらけだったというようなことがあります。女の方のお召し物は僕はわからないけれども、あまり豪華じゃなくてもよろしいのではないかと思いますけどいかがでしょうか。

【ピッカード】 おっしゃるとおりですね。イギリスではめずらしいですけど、雨もありますので、あまりに立派な服装でなくてもいいかもしれません。冗談は抜きにもうちょっとまじめに話をしますと、芸術的に考えて、グラインドボーンというものが、たとえあの環境からそのままどこかに引越して、例えばイギリスの都市部で公演をやっても、それはそれですばらしいものでなくてはならないと私は思っています。

【黒田】 それは全くそのとおりで、だからこそ日本にも来ていただきたいと僕は思うんですが、ただ、先ほどから非常にきれいな景色のところで上演される、そしてハイキン

グのような休憩時間があるということが力説されるんですが、グラインドボーンが一番誇るべきは、そこで上演されているオペラでして、いろいろなことがあるものですから、庭園でワインも飲まなきゃいけない、何もしなければいけないということにならないで、なるべく興味を集中させて。せっかくあそこまでお出かけになるんだったら、オペラに絞って楽しんできていただきたいと、半分羨望を感じながら思います。

【長谷川】 ビデオでもジョージ・クリスティさんがおっしゃっていましたが、ブラック・タイで来なくても全然構わないということで、私どもも生中継のときは普通の背広にネクタイで行きましたし、女性は全員ドレスを着ているわけではありませんので、わざわざ日本から行くときに着物を着ていくなんて、そういう無理をする必要はないということだけは、皆さん覚えておいていただいて大丈夫だと思います。

【石田】 公開講座の後半、そろそろおしまいにさせていただきたいと思います。

壇上で、ゲストのお2人、それから黒田さん、長谷川さんのお話を皆様に聞いていただけるのはこれでおしまいになります。これからは、お2方をはじめ、黒田さん、長谷川さんにもオーディションなどをお聴きいただきます。皆さんもどうぞこのまま、長時間でございませけれども、よろしければおつき合いをいただきたいと思います。

それでは第Ⅰ部公開講座「グラインドボーンに学ぶ」のパートを終わらせていただきたいと思います。長時間ありがとうございました。デイヴィッド・ピッカードさん、ガス・クリスティさん、黒田恭一さん、長谷川芳弘さん、ありがとうございました。(拍手)

【注】

石田麻子

講座内で言及された人名を中心に、主にグラインドボーン音楽祭との関係についてまとめた。

1. ジョン・クリスティ John Christie(1882-1962)
2. オードリ・ミルドメイ Audrey Mildmay(1900-1953)イギリス生まれのソプラノ。
3. 藤原歌劇団は、1934年6月7、8日に《ラ・ボエーム》で旗揚げ。
4. フリッツ・ブッシュ Fritz Busch(1890-1951)ドイツの指揮者。アーヘン、ドレスデンで音楽監督を務めた。ナチスに抵抗して、1933年にドイツを去る。
5. カール・エバート Carl Ebert(1887-1980)ドイツの演出家。ダルムシュタット市立歌劇場、ベルリン市立歌劇場で総監督を務めた後、ドイツを離れた。
6. オリバー・メッセル Oliver Messel(1904-1978)イギリスの美術家、舞台装置家。
7. 《ルクレチアの凌辱》 The Rape of Lucretia 台本ロナルド・ダンカン、1946年7月12日にグラインドボーン音楽祭で世界初演された。指揮エルネスト・アンセルメ、出演ジョン・クロス、キャスリーン・フェリアー、ピーター・ピアーズ他。
8. モラン・カプラ Moran Caplat(1916-2003)イギリス生まれ。1945年以降、36年間にわたってグラインドボーン音楽祭に関わった。
9. ルドルフ・ビング Rudolf Bing(1902-1997)オーストリア生まれ。グラインドボーン音楽祭、エディンバラ音楽祭、メトロポリタン歌劇場総監督を歴任した。
10. ヴィットーリオ・グイ Vittorio Gui(1885-1975)イタリア生まれの指揮者。1956年の第1回NHKイタリア・オペラで来日している。
11. ジョージ・クリスティ George Christie(1934-)
12. ジョン・コックス John Cox(1935-)イギリス生まれの演出家。
13. デイヴィッド・ホックニー David Hockney(1937-)イギリス生まれの画家、舞台装置家。
14. キリ・テ・カナワ Kiri Te Kanawa(1944-)ニュージーランド生まれのソプラノ。
15. フレデリカ・フォン・シュターデ Frederica von Stade(1945-)アメリカ生まれのソプラノ。
16. ジョン・プリッチャード John Pritchard(1921-1989)イギリス生まれの指揮者。グラインドボーン音楽祭には1947年から関わり、1969年～1978年まで音楽監督。
17. ベルナルト・ハイティンク Bernard Haitink(1929-)オランダ生まれの指揮者。1978～1988年までグラインドボーン音楽祭の音楽監督を務めた。
18. ブライアン・ディッキー Brian Dickie(1941-)イギリス生まれ。1962年にグラインドボーン音楽祭でオペラ制作のキャリアをスタートさせ、いくつかの歌劇場を経てから、1981年以降グラインドボーン音楽祭総監督を務めた。

19. ピーター・ホール Peter Hall(1930-)イギリス生まれの演出家、映画監督。
20. サー・サイモン・ラトル(1955-)イギリス生まれの指揮者。バーミンガム市交響楽団で首席指揮者、芸術監督を務め、2002年からベルリン・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督。
21. 1990年前後はポンドが乱高下した時期である。ここでは、1ポンド=240円で換算した。「1992年、1993年の不景気の頃」は、1992年秋のポンド危機で急速にポンドの為替レートが下がった時期でもある。
22. ジャネット・ベイカー Janet Baker(1933-)イギリス生まれのメゾ・ソプラノ。1959年グラインドボーン音楽祭でデビュー。ブリテン作品などを得意とした。
23. ルネ・フレミング Renée Fleming(1959-)アメリカ生まれのソプラノ。メトロポリタン歌劇場をはじめとして、世界中の歌劇場に出演。グラインドボーン音楽祭には1992年から登場。
24. ウラディーミル・ユロフスキ Vladimir Jurowski(1972-)ロシア生まれの指揮者。グラインドボーン音楽祭の音楽監督に2001年に就任。このほか、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者なども務める。
25. 1ポンド=240円で換算した。
26. ルチアーノ・パヴァロッティ Luciano Pavarotti(1935-)イタリア生まれのテノール。
27. モンセラート・カヴァリエ Montserrat Caballé (1933-)スペイン生まれのソプラノ。
28. ロベルト・アラーニャ Roberto Alagna(1963-)フランス生まれのテノール。
29. アンドレアス・ショル Andreas Scholl(1967-)ドイツ生まれのカウンターテナー。
30. ロランド・ビリャゾン Rolando Villazon(1972-)メキシコ生まれのテノール。
31. トーマス・アレン Thomas Allen(1944-)イギリス生まれのバリトン。
32. フェリシティ・ロット Felicity Lott(1947-)イギリス生まれのソプラノ。
33. デイヴィッド・マクヴィカー David McVicar(1967-)イギリス生まれの演出家。
34. ダニエル・デ・ニース Danielle de Niese(1980-)オーストリア生まれのソプラノ。
35. ミレッラ・フレニ Mirella Freni(1935-)イタリア生まれのソプラノ。
36. ジョーン・サザーランド Joan Sutherland(1926-)オーストリア生まれのソプラノ。
37. モーリス・センダック Maurice Sendak(1928-)アメリカ生まれの絵本作家。《かいじゅうたちのいるところ》 *Where the Wild Things are* は、オリヴァー・ナッセン Oliver Knussen 作曲のオペラ作品として、1980年11月28日にブリュッセルで初演された。《ヒギレットィ・ピギレットィ・ポップ》 *Higgiletty Piggletty Pop!* もナッセン作曲。1985年8月5日にグラインドボーン音楽祭で、ナッセン指揮、ロンドン・シンフォニエッタの演奏によって初演された。
38. ロビン・ティッチアーティ Robin Ticciati(1983-)イギリス生まれの指揮者。

当日配布資料

＝オペラ劇場運営の現在・イギリスⅡ＝
オペラをめぐる祝祭、その今日的あり方Ⅱ
～グラインドボーン音楽祭に学ぶ

講演概要

I. 基調講演

グラインドボーン音楽祭——その歴史と 21 世紀の挑戦
～公的助成なく運営されるオペラ・カンパニー

ガス・クリスティ

■グラインドボーン音楽祭の歴史

- ・創設当初のグラインドボーンの様子
- ・当時のプロダクションから

デイヴィッド・ピッカーード

■グラインドボーン音楽祭の現在と未来

DVD 上映

- ・2005 年制作《ジュリアス・シーザー》第 2 幕から「優しい眼差しよ」
- ・2006 年の教育プログラム 'School 4 Lovers'*からの映像

*'School 4 Lovers' は《コジ・ファン・トゥッテ》にもとづくヒップ・ホップ作品

II. パネル・ディスカッション

■グラインドボーン音楽祭のテレビ番組

DVD 上映

- ・「南イングランドからの贈りもの～羊とブラックタイの音楽祭」
(1994 年 8 月 27 日 教育テレビ放送から)
- ・1994 年、グラインドボーン新劇場のこけら落とし公演《フィガロの結婚》

■ディスカッション

■質疑応答

■NHKが放送したグラインドボーン音楽祭オペラ公演

- 1988年 《真夏の夜の夢》(ブリテン)
93年 《皇帝ティトゥスの慈悲》(モーツァルト)
94年 《フィガロの結婚》(モーツァルト) 衛星生中継
 《エフゲニー・オネーギン》(チャイコフスキー) 衛星生中継
95年 《エルミオーネ》(ロッシーニ) 衛星生中継
 《ドン・ジョヴァンニ》(モーツァルト) 衛星生中継
96年 《ルル》(ベルク) 衛星生中継
97年 《セオドーラ》(ヘンデル/オラトリオ)
 《マノン・レスコー》(プッチーニ) 衛星生中継
 《オリィ伯爵》(ロッシーニ) 衛星生中継
98年 《ロデリンダ》(ヘンデル)
 《シモン・ボッカネグラ》(ヴェルディ) 衛星生中継
99年 《ペレアスとメリザンド》(ドビュッシー)
2002年 《カルメン》(ビゼー) 国際共同制作
04年 《こうもり》(J. シュトラウス) 国際共同制作
05年 《ジャンニ・スキッキ》(プッチーニ) 国際共同制作
 《けちな騎士》(ラフマニノフ) 国際共同制作
06年 《シンデレラ》(ロッシーニ) 国際共同制作
 《ジュリアス・シーザー (ジュリオ・チェーザレ)》(ヘンデル)
07年 《コジ・ファン・トゥッテ》(モーツァルト) 国際共同制作…予定

グラインドボーン音楽祭について

音楽祭の概略

グラインドボーン音楽祭は、夏の2週間のオペラ・フェスティヴァルとして、1934年、サセックスの名門の出身であるジョン・クリスティと妻でソプラノ歌手のオードリー・ミルドメイが創設した。「世界水準における最高」をモットーに70余年にわたる伝統の中で、イギリス国内のみならずヨーロッパを代表する音楽祭に成長した。現在は5月から8月までの間に、世界トップ・レベルの歌手や演奏家、指揮者、デザイナー、演出家がグラインドボーンに集まり、6つのプロダクションを上演。あわせて若いアーティストの登竜門としても知られる音楽祭となった。すべての公演に90分の休憩をはさみ、フォーマルな服装に身を包んだ観客が、美しい庭園でのピクニックや構内にある3つのレストランで食事を楽しむ姿が、独特の雰囲気を出している。

世界最高水準のオペラの創造

■6～8週間にわたるリハーサル

■長年、従事する熟練した技術スタッフ（舞台装置、大道具、小道具、衣装）

■創設以来の伝統である芸術的才能の発掘

□若手才能の発掘。

□オペラ・カンパニーの母体としてのグラインドボーン合唱団。彼らの多くが代役を務めるチャンスを得、やがてツアー公演で歌い、音楽祭の舞台に立つ可能性も得る。

■新旧不問の、有名作品と無名作品の上演

□幅広いプログラム。知られざる名作の上演。

□新作の委嘱と芸術形態の発展方法の追求——作品委嘱によるレパートリーの拡充。

■2つの劇場オーケストラ～古楽器とモダン楽器の双方が可能な演奏

□音楽監督 ウラジーミル・ユロフスキ Vladimir Jurowski

・ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団 London Philharmonic Orchestra

・エイジ・オブ・エンライトンメント管弦楽団 Orchestra of the Age of Enlightenment

■現在のオペラハウスは1994年にオープン。

□サー・ジョージ・クリスティの立案で新築。最新の設備を有し、客席は以前より400席増（現在、1,202席、立見席42席、車椅子席12席）。

- 「現代的なデザインで、なおかつ周囲の景色にとけこむような」建物がコンセプト。内装は 100 年以上前のリギダマツ材を再利用。
- 新築工事のために音楽祭を開催できなかったのは 1 シーズンのみ。建築費用の 3,300 万ポンドは公的助成を受けることなく、すべて賄った。

グランドボーン音楽祭ツアー公演とその他の活動

音楽祭が終わると、10 月にはグランドボーンのツアー公演が行われる。ホーム・グラウンドであるグランドボーンを皮切りに英国全土で公演を行い、幅広い観客を集める。

【2006 年ツアー公演プログラム資料参照】

■1968 年より、グランドボーン以外で公演ツアーを開始。現在は本拠地での 3 週間を皮切りにイギリス国内 6 都市を巡回。48 公演 55,000 人以上の観客を集める(2005 年実績)。

■ロイヤル・アルバート・ホールでの「プロムス」にも 1960 年以来、毎年参加。

□放送と録音

*BBC(英国放送協会)との協力関係。

*DVD 独自レーベルの制作。DVD のプロダクション・カタログの製作を開始。放映された作品についても、可能な限り所有権はグランドボーンに帰属。

*グランドボーンの 70 周年の話題は『インディペンデント』紙とタイアップし、祝賀 CD を 30 万人の読者に無料配布。

グランドボーン音楽祭の教育プログラム

教育部門では、年間通じて地域社会と関わるプロジェクトや観客開発のためのプログラムを実施している。1957 年、ルイス刑務所での《フィデリオ》リサイタルからスタート。

■教育部門を設置

□1986 年には教育部門を設置、現在では若者のオペラ・グループ、ワークショップ、スタディ・デイ(ある演目についてのセミナーやリハーサル見学など、演目の背景を多角的に紹介するイベント)、研究会、小・中・高等学校や障害児・学習障害児など特殊学級でのワークショップ、大規模な市民オペラなどのプログラムを展開。

■ユース・プロジェクト

□年間を通して活動するグランドボーン・ユース・オペラ・グループを 4 つ組織。9 歳から 19 歳までのメンバーがプロの指導のもと、自分たちの手で音楽劇を上演。

□アーティスト訓練の 1 つとして、新しい合唱発展プロジェクトが 2005 年 3 月に発足。

グラインドボーン音楽祭合唱団は他より1週間早く活動を始め、演劇、動作、歌のワークショップに参加しながら、個人レッスンや通常の出演をこなしていく。シーズン末には合唱団メンバーにさらなる上演やレッスンの機会が与えられる。

■地域社会プロジェクト

□地元のルイス刑務所では、1週間の滞在を通して19人の男性たちとオリジナル作品を制作した。《魔笛》を土台にしており、タイトルは *Refiner's Challenge*（「より良くなる人の挑戦」の意）だった。また、学習障害のある大人を対象とした、ポーツレイド (Portslade) のベルグレイブ・デイセンターにも滞在し、最終的には同センターの利用者、友人、家族のために公演を行った。

グラインドボーン音楽祭の支援体制——政府援助に頼らない独自予算

グラインドボーン音楽祭は公的助成を受けず、支援者の善意によって成り立つ。

■平均して毎年6つのプロダクション、76回の公演を開催

■過去一度も公的助成を受けない運営

- 収入の60%はチケット収入。25%がファンド・レイジング（協賛金、寄付金）とメンバーの会費により、チケット料金を低く抑え、より幅広い層の観客動員を可能にする。
- 多くの個人と団体からの援助。個人からの支援全体は、企業よりも多い。
- アーティストもグラインドボーン音楽祭の支援者（通常報酬の何分の一かという形で参加）の位置づけである。
- 米国グラインドボーン協会(Glyndebourne Association America)、フェスティバル・ソサエティ(Festival Society)、音楽祭創設時の出資メンバーを含め総勢6,386名の会員（『2004年度年報』より）。
- グラインドボーン・オン・ツアー(GOT)も独自の会員制をとり、「フレンズ・オブ・GOT」は1,471名（『2004年度年報』より）。
- ファンド・レイジングの実績は2003年度で19万8千ポンド。
- グラインドボーンのツアー公演へのアーツ・カウンシル・イングランドからの出資。

資金と収支

■会場の高い稼働率

□舞台は年間を通して稼働している。音楽祭期間中だけでなく、「ツアー」のオープニング・ウィークが行われる。その他の時期にもコンサート、リハーサル、装置の組み立てなどに使われており、1年でまったく使われない日は4週間のみ。

■オペラのプロダクションの貸し出し

□年間平均 3 つのプロダクションを、他の歌劇場に貸し出し（注：プロダクション＝演出、舞台装置、照明などのいわばパッケージとした単位。劇場によっては、この単位で他劇場に貸し出すことがある）。

□収入は新たなプロダクション制作に投資。

■新しいテクノロジーへの投資

□効率と顧客サービス向上のために、常に新しいテクノロジーに投資。

2005 年シーズンより新字幕システム、新しい照明装置を導入。

2006 年シーズンより、Tessitura データベース・システムの導入。

□チケット窓口、開発部門、ファンド・レイジング、マーケティングのオペレーションを統合した。

■公式ウェブサイト www.glyndebourne.com では、2003 年より、すべての公演のオンライン予約が可能となった。現在、年間 1,400 万人アクセスしている。

将来のプラン——歴史の中で重要視してきた「クオリティ」のために

■若い才能を伸ばす。

■新しいレパートリーを増やす。

■劇場に対する特別な親近感や、グラインドボーンの贅沢な環境でオペラを観るという「クオリティ（特別な価値）」を大切にする。

■世界トップ・レベルの歌手や演出家、デザイナー、指揮者の特別協力。

■財政目標

□将来のために積立金を確保

□新プロダクションへの継続投資

□オペラハウス設備の最大限のメンテナンス

□音楽祭の余剰金でツアー経費の大部分をカバー

□将来的に可能性のある収入源への投資

*公式ウェブサイトの改善

グラインドボーン音楽祭2007年シーズン・プログラム

演目	日付	指揮	演出	舞台スタッフ	キャスト	備考
マクベス Macbeth G. ウェルティ	2007年 5月19、23、26、31日 6月3、6、9、15、18、 23、29日 7月2、9、12、17、21 日	Vladimir Jurowski/ Damian Iorio(6月 6、9、15日)	Richard Jones	舞台デザイン:Ultz 照明:Wolfgang Göbbel 受付:Linda Dobell	Lady Macbeth: Sylvie Valayre Macbeth: Andrzej Dobber Banquo: Stanislav Shvets Macduff: Peter Auty Lady Macbeth's lady-in-waiting: Svetlana Sozdateleva	オーケストラ:ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団 London Philharmonic Orchestra 合唱:グラインドボーン合唱団 The Glyndebourne Chorus ロンドン・トーク:3月26日(月) スタディ・デイ:5月6日(日) プレ・トーク:6月3日(日)
コジファン・トゥッテ Cosi fan tutte W. A. モーツァルト	2007年 5月22、25、27、30日 6月2、5、8、10、16、 22、25、30日 7月4、8、11、15日	Robin Ticciati	Nicholas Hytner	舞台デザイン:Vicki Mortimer 照明:Paule Constable	Ferrando: Pavol Breslik Guglielmo: Stéphane Degout Don Alfonso: Alfonso Antonozzi Fiordiligi: Rachel Harnisch Dorabella: Rinat Shaham Despina: Ainhoa Garmendia Don Ramiro: Maxim Mironov Dandini: Pietro Spagnoli Don Magnifico: Alessandro Corbelli Clorinda: Jaël Azzaretti Tisbe: Lucia Cirillo Angelina: Ruxandra Donose Alidoro: Umberto Chiummo	オーケストラ:ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団 London Philharmonic Orchestra 合唱:グラインドボーン合唱団 The Glyndebourne Chorus プレ・トーク:5月27日(日)、6月10日(日)、7月8、15日(日)
チェネレントラ La Cenerentola G. ロッシーニ	2007年 6月17、21、24、27日 7月3、6、10、13、 16、19、26、29、31 日 8月3、5、7、12日	Vladimir Jurowski/ Roberto Polastri(7 月10、13、16、19 日)	Peter Hall	装置:Hildegard Bechtler 衣裳:Moritz Junge 照明:Peter Mumford 舞台監督:Lynne Hockney	Evangelist: Mark Padmore Christus: Henry Waddington Soprano: Ingela Bohlin Alto: Sarah Connolly Tenor: Andrew Tortise Bass: Christopher Purves	オーケストラ:エイジ・オブ・エンライトンメント管弦楽団 Orchestra of the Age of Enlightenment 合唱:グラインドボーン合唱団 The Glyndebourne Chorus プレ・トーク:6月24日(日)、7月29日(日)、8月5、12日(日)
マタイ受難曲 St. Matthew Passion J. S. バッハ	2007年 7月1、5、7、14、18、 22、27日 8月2、4、9、16、19、 24、26日	Richard Egarr	Katie Mitchell	舞台デザイン:Vicki Mortimer 照明:Paule Constable 舞台監督:Struan Leslie	Tristan: Robert Gambill Isolde: Nina Stemme Brangäne: Katarina Karnéus Kurwenal: Bo Skovhus King Marke: René Pape / Georg Zeppenfeld(8月22日) Melot: Stephen Gadd A Shepherd / A young sailor: Timothy Robinson Steersman: Richard Mosley-Evans	オーケストラ:ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団 London Philharmonic Orchestra 合唱:グラインドボーン合唱団 The Glyndebourne Chorus ロンドン・トーク:4月16日(月) スタディ・モーニング:7月22日(日) プレ・トーク:8月19日(日)
トリスタンとイゾルデ Tristan und Isolde R. ワーグナー	2007年 8月1、6、10、14、 18、22日	Jiří Belohlávek	Nikolaus Lehnhoff	装置:Roland Aeschlimann 衣裳:Andrea Schmidt- Futterer 照明:Robin Carter / Roland Aeschlimann	Prologue / Peter Quint: William Burden Governess: Camilla Tilling Mrs Grose: Anne-Marie Owens Miss Jessel: Emma Bell	オーケストラ:ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団 London Philharmonic Orchestra ロンドン・トーク:6月11日(月)
ねじの回転 The Turn of the Screw B. ブリテン	2007年 8月11、13、15、17、 21、23、25日	Edward Gardner	Jonathan Kent	舞台デザイン:Paul Brown 照明:Mark Henderson		

※チケット料金: ¥165~¥10(¥40,000~¥2,400) / (トリスタンとイゾルデ)のみ: ¥185~¥20(¥44,000~¥4,800) (1ポンド=240円で換算)

グラインドボーン音楽祭2006年ツアー公演プログラム

演目	日付	指揮	演奏	演出	舞台スタッフ	キャスト	チケット料
グラインドボーン Glyndebourne ■10月10～28日	10月10、14、22、25日	Robin Ticciati	グラインドボーン・オーケストラ Glyndebourne on Tour Orchestra The Glyndebourne Chorus (*1)	Stephen Lawless	装置: Benoit Dugardyn 衣装: Ingeborg Bernerth 照明: Paul Pyant 振付: Nicola Bowie	Eisenstein: John Graham-Hall Rosalinde: Majella Cullagh Adele: Amelia Farrugia Prince Orlofsky: Allison Cook	£53～£14立席£7 (¥13,000～¥3,400 立席¥1,700)
コジ・ファン・トゥッテ Cosi fan tutte W. A. モーツァルト	10月12、15、20、23、26、28日	Gérard Korsten	グラインドボーン・オーケストラ グラインドボーン合唱団 (*2)	Nicholas Hytner	時代考証: Samantha Potter 舞台デザイン: Vicki Mortimer 照明: Paule Constable	Fiordiligi: Aga Mikolaj Dorabella: Jenny Carlstedt Guglielmo: Rodion Pogossov Ferrando: Andrew Kennedy	
ねじの回転 The Turn of the Screw B. プリテン	10月21、24、27日	Edward Gardner	グラインドボーン・オーケストラ (*3)	Jonathan Kent	舞台デザイン: Paul Brown 照明: Mark Henderson	Peter Quint: Daniel Norman Governess: Kate Royal Mrs. Grose: Anne-Marie Owens Miss. Jessel: Rachel Cobb	
ニュー・ヴィクトリア・シアター・ウォキング New Victoria Theatre, Woking (Surrey) ■10月31日～11月4日	10月31日、11月3日	Robin Ticciati	*1に同じ				£60～£27 (¥14,000～¥6,500)
コジ・ファン・トゥッテ Cosi fan tutte W. A. モーツァルト	11月1、4日	Gérard Korsten	*2に同じ				
ねじの回転 The Turn of the Screw B. プリテン	11月2日	Edward Gardner	*3に同じ				
ロイヤル・プリマス・シアター Theatre Royal Plymouth (Plymouth) ■11月7～11日	11月8、11日	Robin Ticciati	*1に同じ				£45～£15 (¥11,000～¥3,600)
コジ・ファン・トゥッテ Cosi fan tutte W. A. モーツァルト	11月7、10日	Gérard Korsten	*2に同じ				
ねじの回転 The Turn of the Screw B. プリテン	11月9日	Edward Gardner	*3に同じ				
ミルトン・キーネズ・シアター Milton Keynes Theatre (Central Milton Keynes) ■11月14～18日	11月14、17日	Robin Ticciati	*1に同じ				£47～£19 (¥11,200～¥4,600)
コジ・ファン・トゥッテ Cosi fan tutte W. A. モーツァルト	11月15、18日	Rory Macdonald	*2に同じ				
ねじの回転 The Turn of the Screw B. プリテン	11月16日	Edward Gardner	*3に同じ				
ノーリッチ・シアター・ロイヤル Norwich Theatre Royal (Norwich) ■11月21～25日	11月21、24日	Robin Ticciati	*1に同じ				£46～£6 (¥11,000～¥1,400)
コジ・ファン・トゥッテ Cosi fan tutte W. A. モーツァルト	11月22、25日	Rory Macdonald	*2に同じ				
ねじの回転 The Turn of the Screw B. プリテン	11月23日	Edward Gardner	*3に同じ				
リージェント・シアター Regent Theatre (Stoke-on-Trent) ■11月28日～12月2日	11月28日、12月1日	Robin Ticciati	*1に同じ				£41～£15 (¥9,800～¥3,600)
コジ・ファン・トゥッテ Cosi fan tutte W. A. モーツァルト	11月29日、12月2日	Rory Macdonald	*2に同じ				
ねじの回転 The Turn of the Screw B. プリテン	11月30日	Edward Gardner	*3に同じ				
サドラーズ・ウェルズ Sadlers Wells (London) ■12月5～9日	12月6、9日	Robin Ticciati	*1に同じ				£60～£13 (¥14,000～¥3,100)
コジ・ファン・トゥッテ Cosi fan tutte W. A. モーツァルト	12月5、8日	Rory Macdonald	*2に同じ				
ねじの回転 The Turn of the Screw B. プリテン	12月7日	Edward Gardner	*3に同じ				

**出演者
プロフィール**

プロフィール

ガス・クリスティ (Gus Christie)

ガス・クリスティは、グラインドボーン音楽祭の創始者であるジョン・クリスティとオードリー・ミルドメイの孫であり、父ジョージ・クリスティの跡を継いで、2000年に同音楽祭の理事長に就任した。

ケンブリッジ大学キングス・カレッジでは動物学を専攻。卒業後はトライシクル・カンパニー、ナショナル・シアター・ロンドン、バティニャーノ祝祭劇場(イタリア)、ロバート・フォックス・アソシエイツなどの劇場に勤務した。

1989年からはパートリッジ・フィルムズ社でアシスタント編集者およびカメラマンとして活躍し、1991年にフリーのカメラマンとして独立。“A Puffin’s Tale”(1991年)、“A New Fox in Town”(1993年)、“The Lion’s Share”(1994年)、“Hugo’s Diary”(1995年)、“Red Monkeys of Zanzibar”(1996年)、“The Battle of the Sexes, The Tale of Two Families”(1998年)、“Buffalo, the African Boss”(1999年)といったドキュメンタリー作品がある。

プロフィール

デイヴィッド・ピッカード (David Pickard)

1960年、ロンドン生まれ。ケンブリッジ大学コーパス・クリスティ・カレッジを卒業。1982年よりロイヤル・オペラハウスのカンパニー・マネジャーとして、ロサンジェルス、アテネ、東アジアへのツアーを成功に導いた。

以降、ニュー・シェイクスピア・カンパニー(1987～89年)、ケント・オペラのマネジング・ディレクター(1989～90年)、ジャパン・フェスティヴァル 1991のアシスタント・ディレクター(1990～91年)、ヨーロッパ芸術フェスティヴァル(1991～92年)など芸術部門における要職を数多く務めた。

1993年、エイジ・オブ・エンライトンメント管弦楽団のチーフ・エグゼクティブに指名され、その後8年間にわたり、同管弦楽団の英国内外における活動を拡大し、教育プログラムの開発に努めた。2001年7月より、グラインドボーン音楽祭の総監督を務めている。

プロフィール

長谷川 芳弘 (はせがわ よしひろ)

- 1978年 東京大学文学部卒業
日本放送協会入局、松江放送局に赴任
- 1983年 音楽番組部に異動、リサイタル番組を担当
- 1986年 オペラ・バレエ番組を担当
《カヴァレリア・ルスティカーナ》(藤原歌劇団)収録
- 1987年 《トスカ》(二期会)収録
《ニュルンベルクのマイスタージンガー》(ベルリン国立歌劇場日本公演)収録
《リゴレット》(藤原歌劇団)収録
- 1988年 《トロヴァトーレ》(藤原歌劇団)収録
《タンホイザー》(二期会)収録
《メリー・ウィドー》(二期会)収録
- 1989年 《清教徒》(藤原歌劇団)収録
《平泉炎上》(スタジオオペラ、ザルツブルク・テレビオペラ賞参加)演出
《ちゃんちき》(二期会)収録
《ワルキューレ》(ミュンヘン・オペラ)現地収録
《神々のたそがれ》(ミュンヘン・オペラ)現地収録
- 1990年 「ニューイヤーオペラコンサート」演出
衛星放送局、NHKエンタープライズ、等に異動
- 1998年 《さまよえるオランダ人》(ベルリン・ドイツ・オペラ日本公演)収録
- 1999年 岐阜局に異動
- 2002年 音楽・伝統芸能番組部に異動
- 2006年 音楽・伝統芸能番組部長

プロフィール

黒田 恭一（くろだ きょういち）

音楽評論家。

1938年生まれ。早稲田大学在学中から雑誌・新聞への執筆を始め、以後音楽専門誌のみならず、一般誌での連載を多数担当。FMやラジオ、テレビ等の音楽番組解説者としても活躍。現在はBunkamura オーチャードホールのプロデューサーをつとめるなど、その活動は多岐にわたる。

クラシック・ファンの裾野を広げる活動に精力を注ぎ、幅広い層からの支持と信頼を獲得している。主な著書に『オペラへの招待』（朝日文庫）、『はじめてのクラシック』（講談社現代新書）、『ぼくのオペラノート』（東京書籍）、『水のように音楽を』（新潮社）、『ぼくだけの音楽』（主婦の友社）、『ぼくのオペラへの旅』（JTB）などがある。

プロフィール

石田 麻子（いしだ あさこ）

東京芸術大学音楽学部卒業後、ドイツの音楽出版・ショット社の日本法人に勤務。

東京芸術大学大学院音楽研究科修了。

昭和音楽大学オペラ研究所嘱託研究員を経て、

昭和音楽大学専任講師。

日本オペラ団体連盟発行『日本のオペラ年鑑』編纂委員。

学術博士。

[著書]

『日本のオペラ作品』（昭和音楽大学、2005）

[論文]

『オペラ公演からみた地域文化政策の一考察』

『日本の劇場運営におけるオペラ制作の課題』（共同論文）

『北九州市圏域の潜在的舞台観客層に対する効果的なマーケティング手法の開発』（共同論文）

『日本におけるオペラ公演の観客形成の一考察 —メディアとオペラ観客—』

プロフィール

中嶋 寛 (なかしま ひろし)

1976年東京大学文学部仏文科卒。

NHK衛星放送などで欧米のニュースや討論、演説、インタビューの同時通訳で活躍。放送局の仕事のほかNGO、大学、研究機関、法律家団体、精神科医、セラピスト等をクライアントに、会議通訳。主に国際政治や時事問題、学術的分野、社会性のある分野（安全保障、人権、環境問題、国際法、刑事司法、精神保健、臨床心理学、障害者、歴史、等）で活動。通訳グループ「国境なき通訳団」を主宰。

音楽関係では、秋吉台国際 20 世紀音楽セミナー&フェスティバルや武生国際音楽祭で作曲家セミナーやレッスンの通訳を手がける。

教職では、アメリカのウエスト・ヴァージニア州立大学でフランス語を2年間教える。その後は長年通訳の指導を通訳学校やアメリカ大使館で行い、現在は長崎純心大学の非常勤講師として比較文化科で国際政治を教える。

文部科学省特別補助「オープン・リサーチ・センター整備事業」

公開講座
オペラ劇場運営の現在・イギリスⅡ
オペラをめぐる祝祭、その今日的あり方Ⅱ
～グランドボーン音楽祭に学ぶ

講義録

2007年3月31日発行

昭和音楽大学オペラ研究所

〒243-8521 神奈川県厚木市関口 808

tel: 046-245-1055 fax: 046-245-4400

e-mail: opera@tosei-showa-music.ac.jp <http://www.tosei-showa-music.ac.jp/orc/>

©昭和音楽大学 禁複製・無断転載 非売品

